

ユートピア旅行記叢書 5

Collection des Voyages aux Utopies

ユートピア旅行記 叢書

5

ヨーロッパ精神の危機の時代 3



カレジャヴァ物語
ジャック・マセの航海と冒険
ピエール・ド・メザンジュの生涯と冒険と
グリーンランド旅行

岩波書店

永瀬春男(ながせ はるお)

1948 年生 大阪大学大学院博士課程修了 17 世紀フランス文学・思想専攻
『パスカル全集』(共訳, 白水社) “Rhétorique de la machine arithmétique:
signification de son invention dans la pensée de Pascal” (*Etudes de
Langue et Littérature françaises*, n° 72, 1998) など

小西嘉幸(こにし よしゆき)

1943 年生 京都大学大学院博士課程中退 18 世紀フランス文学専攻 『テクス
トと表象』(水声社) 『ルソー, ジャン=ジャックを裁く——対話』(訳, 白水社
『ルソー全集』) スタロビンスキー 『自由の創出』(訳, 白水社) マクナマーズ
『死と啓蒙』(共訳, 平凡社) など

鈴木田研二(すずきだ けんじ)

1959 年生 大阪市立大学大学院博士課程満期退学 18 世紀フランス文学専攻
マクナマーズ 『死と啓蒙』(共訳, 平凡社) 「イギリス小説からディドロが得た
もの」(*『フランス語フランス文学研究』* 57 号) など

カレジャヴァ物語

ジャック・マセの航海と冒険

ピエール・ド・メザンジュの生涯と冒険と

グリーンランド旅行

ジルベール

ティソ・ド・パト

ユートピア旅行記叢書第 5 巻

1998 年 11 月 27 日 第 1 刷発行

ながせ はるお こにしよしゆき
訳 者 永瀬春男 小西嘉幸
すずき だけんじ
鈴木田研二

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000

印刷・理想社 函・精興社 製本・松岳社

© 岩波書店 1998 ISBN 4-00-026095-2 Printed in Japan

凡 例

一 本書に収録した三篇は、いずれも原本を圧縮して翻訳したものであり、各篇の圧縮率はそれぞれ『カレジャヴァ物語』は原本の八分の七、『ジャック・マセの航海と冒険』は五分の四、『ピエール・ド・メザンジュの生涯と冒険とグリーンランド旅行』は五分の二である。

一 各篇の翻訳の底本および参照した版本については、巻末の解説に記した。

一 原文を省略した際には「」内にその要約を記した。

ただし、『ピエール・ド・メザンジュ』においては長短多様な省略が多数ほどこされており、短い省略に際しては要約せず、↑の印を付した。文頭に付された場合は前略を、文中の場合は中略を、文末の場合は後略をそれぞれ表す。

一 『カレジャヴァ』と『ジャック・マセ』においては巻・章などの構成や段落分けは原本にしたがった。『ピエール・ド・メザンジュ』の原本には章分けがなく、段落分けも、例外的な一箇所を除きほどこされていないが、読みやすさを考慮し、訳者の判断で、全体を三部に分け、改行などをほどこした。

一 原注は*、**……の印を付し、段落の切れ目に収めた。ただし、『カレジャヴァ』においては、聖書の出典を指示した原注に限り、本文中に、慣例的な略記の仕方で「」内に記した。

例 (マタイ、一五の三四) 「マタイによる福音書」第二章三四節の略

一 訳者による注は(1)(2)……の番号を付し、原注と区別した。

一 原文のラテン語はカタカナで表記した。

一 『カレジャヴァ』においては、同一話者の会話の途中で段落が改まるときには、その冒頭に再度「の印を付した。
一 ()内は訳者による補足または注記である。

目次

凡 例

カレジャヴァ物語

ジルベール

永瀬春男訳

I

第一卷 3

第一部 カレジャヴァの名とその法律の起源について 3

第二部 三人のフランス人のリトアニア旅行について 8

第三部 四人のヨーロッパ人のカレジャヴァ到着について 13

第二卷 アヴァ人となるために求められる資質について 15

第一の対話 学者の権威について 15

第二の対話 歴史に寄せるべき信について 21

第四の対話 理性について 25

第三卷 神の存在について 30

第一の対話 神の観念について 31

第二の対話 神の存在について 34

第四卷 魂の不滅について 38

第一の対話 38

第二の対話 反論への回答 42

第四の対話 前の対話の帰結 46

第五の対話 自由について 48

第五卷 アヴァ人の様々な習慣について 50

第一の対話 土地の耕作について 50

第二の対話 アヴァ人の全体的な社会制度について 51

第三の対話 アヴァ人の結婚について 52

第四の対話 子供の教育について 54

第六卷 アヴァ人の神学と道德の要約 57

第一の講義 神の独立性について 57

第二の講義 神の善意について 58

第三の講義 神の摂理について 59

第四の講義	アヴァ人の道德の原理	65
第五の講義	来世での刑罰と報酬について	68
第六の講義	神の正義と慈悲について	71
第八の講義	神の礼拝の仕方について	75
第七卷	ユダヤ教について——削除	76
第八卷	キリスト教について——削除	76
第九卷	マホメット教について〔省略〕	76
第一の対話	『コーラン』の「雌牛の章」の一句について	
第二の対話	「イムラーン家の章」について	
第三の対話	マホメットの奇蹟について	
第四の対話	マホメットの文体と神への愛について	
第一〇卷	神が我々を創造された目的、 および我々をこの世に置かれた目的について	77
第一の対話	神が我々をこの世に置かれた目的について	77
第二の対話	神は我々がこの世で幸福であることを望まれる	82
第三の対話	アダムの罪について〔省略〕	86
第四の対話	邪欲について〔省略〕	86

第一一巻	キリスト教とアヴァ人の習俗および意見との比較	87
第一二巻	クリストフィルとサミエスキの出発について、 またアヴァ人の準則を他の国々の習俗に適用すること	113

ティソ・ド・パト

ジャック・マセの航海と冒険……………小西嘉幸訳

121

編者の手紙

123

第一章	著者の学歴、職業、船出。スペイン海岸での最初の難破	125
第二章	リスボン滞在、その他	135
第三章	第二の航海、および見知らぬ海岸に難破すること	149
第四章	著者は他の乗組員一同と別れ、二人の仲間だけと 未知の国々に入る。行く手に待ち受ける障害のかずかず	153
第五章	著者一行の冒険の続き。人の住む国に入るまで	160
第六章	いとうるわしき国とその住民、言語、習俗、 慣習などの発見について。およびわれらが著者たちが ここで得た尊敬について	170

第七章	宗教に関して著者が村の判事および神官と交わした興味深い会話	188
第八章	著者は王宮に案内される。 君主たちの起源を述べ、宮殿、神殿などを描写する	204
第九章	王と著者とのきわめて興味深い会話のかずかず	212
第一〇章	この国々で行われている誕生と埋葬の儀式。 正義を司る仕方、その他の注目すべき事柄	224
第十一章	著者一行の冒険の続き——宮廷を辞去するまで	235
第十二章	著者はこのうるわしき国を離れる。脱出の方法。 海辺で、この大陸海岸に座礁したときの 乗組員の一部と再会することなど	236
第十三章	著者の不在中に他の乗組員たちの身に起こったこと。 この国を離れるまでの一行の冒険の続き	244
第十四章	いかにして著者は南大陸からゴアに渡ったか。 著者は審問にかけられる。牢獄で出会った中国人の物語。 いかにして二人は牢から出たか	264
第十五章	リスボンへの出発。著者は捕らえられ、奴隷にされる。 奴隷の間に著者の身に起こったこと	280

第一章

第二章で語られたペーテル・ヘッデの冒険談。
および著者のロンドン到着など

297

ティソ・ド・パト

ピエール・ド・メザンジュの生涯と 冒険とグリーンランド旅行

鈴木田研二訳

305

ウォルター・ジョゼフ閣下へ

307

緒言

311

I

II

III

313

335

469

解説1 『カレジャヴァ物語』について

解説2 ティソ・ド・パトの二篇の作品について

永瀬春男
小西嘉幸
鈴木田研二

497

ジルベール

カレジャヴァ
物語

永瀬春男 訳

カレジャヴァ物語、あるいは理性ある人々の島の物語

彼らの道徳とキリスト教との比較付き

誠ヲ尽クシタ熱意ヲコメテ、君ニ献ズル私ノ贈物ヲ、

君ハ理解シナイウチカラ、サゲスンデ、打チステルコトノナイヨウニシテホシイ。

ルクレティウス『物の本質について』、第一卷⁽¹⁾

第一 卷

第一部 カレジャヴァの名とその法律の起源について

「カレジャヴァ」とは現地の言葉で「人間の土地」という意味である。住民たちは自国をこの名前で呼ばれたいと思っているが、それは地上で理性を具えているのは自分たちだけだと考えているからだ。彼らにとってよその国民と

きたら、あまりに常軌を逸した考えをもっており、風習も滑稽きわまりないものに見えるので、人間の資格を拒んでもなんの痛痒も感じないというわけだ。島人たちがその主張どおり賢明であることは、私も認めよう。けれどもいくら賢明だからといって、自分たちをこれほど買いかぶるいわれがあるものだろうか。他国の人々に対する無礼なさげすみを、正当化できるものだろうか。いずれにしても、こんな途方も無い考えをもつ人々と知り合いになり、何を根拠にそんな風に考えるのか、その点だけでも理解したいと思うのは無理からぬことだろう。最高度の知恵を誇るこの人々が、理由もなしに他の人々の歩む道はずれ、地上の誰からも知られぬ道をたどったと考えるわけにはいかぬであろう。おそらくまた、自然法以外のどんな助けもため人間たちにとって、カレジャヴァ人が自力で到達した道徳的完璧さを超えることなど、実際できない相談であろう。

(1) 樋口勝彦訳、岩波文庫、一二頁。

「アヴァ人」という名前のほうを、彼らは一層好んでいる。つまり、自ら名乗るとき、彼らは土地を意味する「カレ」という語と、フランス語の「ド(de、……の)」にあたる「ジ(Ji)」の文字を取り去るのである。それ故同じ理由から、それにまたかなり発音にくい名前を縮めるためにも、我々もこれからは彼らを「アヴァ人」とのみ呼ぶことにしよう。

島人たちが、自分たちこそ殊の外「人間」という名に値すると思っているにせよ、こんな名前がついたのは全く偶然のせいにすぎない。

今から八〇〇年ないし九〇〇年前のこと、ひとりの医師が医術を極め、その知識によって人々の生命を左右し、思いのままに寿命を引き伸ばすことができる身となった。

医師は名をアヴァといい、生まれはこの物語の舞台となる島の隣国であった。ところが医師は、ある法律の採用を国王に進言して断られたことに憤慨し、故国を捨ててしまった。その法律は、その後アヴァ人たちに受け入れられ、今日に至るまできわめて細心に遵守されている。⁽²⁾

(2) 第一巻、第一部の末尾(七頁)や、第四巻、第四の対話の末尾(四七頁)で言及される「共和国の基本法」を指す。

アヴァは近親者のうちから、王の怒りが及ぶ恐れのある一〇〇人ないし一五〇人を引き連れてきた。実際、もしこの者たちが国に残っていたら、アヴァの裏切り行為に対する報復として、相応する刑罰を被ったことだろう。このよそ者たちがカレジャヴァに到着し、海岸から二、三マイル離れた山を野营地としたところ、島の元からの住民はすぐさま使いを寄こし、彼らがどんな理由でどこからやって来たのか知ろうとした。アヴァにはミロシという名の義弟があり、この国の言葉をかなりよく知っていた。ところが彼はどんなに請われても、きちんと応答するかわりに、ただアヴァの功績と学識について語るのみであった。アヴァの到着とその優れた医師の噂は、瞬く間に島人のあいだに広まった。噂を聞いてこの医師のもとへ駆け付けた何人もの病人を、彼があつという間に治してみせると、患者たちはすぐさま王の顧問会議に赴き、病の驚嘆すべき回復ぶりについて報告した。会議では折から、闖入者たちをどう処遇すべきかが討議されていた。顧問会議においてもそれなりに顔の知られた多くの人々が、こんなにも速やかに快癒したさまを目にして、皆は茫然自失のあまり、何ひとつ決めぬまま散会した。

時の統治者カクミゾン⁽³⁾は、アヴァの医師の腕前をわが身にも試してみたいと願うあまり、大臣たちの諫めも顧みず、翌日、農夫の身なりをして医師に会いに出かけた。アヴァはこのにせ農夫の体を診察しても何の病気も見つからないので、ミロシを呼んでその点を尋ねさせた。カクミゾンが答えて言うには、ほんの僅かでも動いたり、暮らしたため

に働いたりしようものなら、彼の体は悪臭を発し、周囲の者に耐え難い思いをさせるといふのである。これしきの欠陥を直したいと切に願うところ、王の紳士^{ハットム}ぶりを如実に示しており、変装のうちにもその正体を垣間見せていたのである。アヴァと義弟は、農夫と称するこの人物が高貴の人であるまいかという疑念を晴らそうとして、しばらく他の連中と一緒に働くほうが、病を癒してあげやすいでしようと言った。「ただし」と付け加えて言うことに、「我々にはあなたの服装は珍奇すぎるね。労働者たちの気が散って仕事がかどらなくてはこまるので、彼らと同じ身なりをしなさい」。ここで言いつけにそむいたりすれば、大きな疑惑を与えかねないし、既に疑いが兆しているのなら、それを強めることになろうと思われた。

こうしてカクミゾン^{ミロシ}は他の人々とともに、山で一番良い土地を開墾する仕事に従事した。しばらくしてアヴァの助けを請うてきた病人に、ミロシは（少し離れたところから王を指さして）、あの人物は君たちのなかで誰か非常に身分の高い者に似てはいないかと尋ねた。「なんとまあ」と病人は答えた。「あの人は王様そっくりですよ」。ミロシはすぐさまカクミゾンのもとへ行き、こう言った。「臣下の方々は悪臭の苦痛にも喜んで耐えておりますし、ご病気のせいで王にお仕える熱意が鈍っているわけでもありません。それなのに、こうして御身をあえて見知らぬ者たちの手に委ねてまで、臣下の苦痛を除いてやろうとなさるのは、ひとえに王たるお方の深いお慈悲の賜物にほかなりません。そうであれば」と彼は続けた。「その同じお慈悲におすがりして申し上げますが、どうかこの無用な荒蕪地の山を我らにお譲りくださり、我らが誰にも頼らず、好むままに暮らせるようお計らい頂きたいのです」。カクミゾンが呆然として何とも返事をしないので、ミロシはこう続けた。「お心におとめ頂きたいのですが、山上には既に何台かの機械が配置されています。これを作動させれば、麓の空気はどこまかしこも一瞬のうちに、きわめて回りの速い毒で汚